**「沈んでっちゃう」 2017 08 13**

**マタイ. 14:22-33 スティンストラ牧師**

**今日の聖書の話は、子供のころからサンデースクールに来ていた方々は何度も聞いたことがあるといわれるかもしれない。　最初のいくつかの言葉が読まれた時点で私にはそれがどういう話であったかを思い出すことができる。おそらくみなさんの中にも少なくともどんな話だったか覚えていた方がいるだろう。そしてこの福音書箇所のいろいろな説教がどんな話だったかも簡単な決まり文句で覚えている方も間違いなくいることだろう。例えば「いつもイエスに注目していなさい。」であるとか、「唯一嵐をやり過ごすことができる方法は、イエスもいっしょに船に乗っていただくことだ。」とか。結果としてみなさんはキリスト者として行動基準に従って生きる事を頭ではわかっても、そのような行動がとれない自分たちに気がつき失望することにもなる。**

**しかし、純粋な心配から生じた失望は、もう我慢してやり過ごすしかない時もあるが、ペトロの大荒れだった湖で起こした失敗、その試みについてのきまりの悪い話は、願わくばそのまま長い時間をかけてやり過ごすことにならないようにしたい。そしてすぐにすべての人に、体が凝り固まってしまうような恐れは共通しているということに気がつきたいと思う。むこうみずな弟子の恐怖心をよく考察し、それは自分自身も抱くような恐れであることに気がつき、今朝はそのことについて、自分自身も体験する苦悩が自分の生き様を完全に変えてしまうものであることを理解する、いやむしろ感謝することは、良いことなのだと思う。ペトロの「ああもうだめだ沈んでしまうよ。」という恐れは私たちもしばしば体験するものであることに気づくことができるということは、風や波となって現れてくださる主ご自身の手によって救われる喜びを分かち合うことへの第一段階であるので、とても大切なことである。**

**今日の福音書のストーリは、弟子たちがイエスから遠く離されてしまいすぐに不安になっていくことから始まっている。イエスが必要としていたひとりだけになる時間を満喫するために、弟子たちをボートに乗せて湖の対岸に行くように仕向けたのである。イエスは父なる神と対話するために一晩を過ごし、休息を得て、それによって、再び伝道の業に元気よく仕えることに備えたのである。　しかし、それは弟子たちにとって、不幸な出来事となってしまった。つまり、一夜を湖の上で過ごすことになり、しかも嵐に出会い、望んでいた対岸にはたどりつけなかった。**

**そのような状況が、明け方の奇跡が起きるお膳立てとなるのである。イエスは弟子たちがたどった経路と同じ道を通っていくことを決心した。　しかし、イエスの場合は船という手段無しに行くのである。とても普通の人ができるようなことではないことだが、イエスは湖の上を歩いて対岸に向かって出発するのである。そして弟子たちに近づいて行くが、弟子たちはそれがイエスだとは気がつかない。　弟子たちが船の上で平穏にリラックスしていたから気がつかないのではなく、人が湖の上で浮上して歩いてくるなどということは想像にも及ばないことだったからである。　彼等は体重の無い幽霊かなにかが湖上をやってきたのではと思い、新たなる脅威に襲われ、いわば絶望の祈り（絶叫）へと追いやられてしまうのである。イエスは弟子たちが見ている自分は、イスラエルの神につながっていて、湖の底にある地獄の入り口に彼等を突き落とすようなサタンによって送られた幽霊ではなく、それどころか嵐が起こる海の主であり、その嵐を止めることもできることを示し、安心させようとする。**

**ペトロは、そのような主が本物の主であることの証拠を欲しがってしまい、自らがその奇跡の一部になりうるのかどうか、身の危険を冒すことになる。　イエスが「来なさい」と言った途端に、船から飛び出して、イエスといっしょになって歩み出そうとする。そこには決して、歩けなくなる可能性について考えたりする余裕もなく、実行に移してしまった。今日のストーリの中でのちょっとした転換点なのだが、うっかりすると見逃してしまう。その転換点とは、おどろく事に水の上を歩くことができ始める中で、このむこうみずな弟子は突如として嵐の恐怖におびえてしまうのである。ただちに、ペトロは本来であれば次の一歩を進めるはずだったのに、彼のペトロ（岩の意)という名前のごとくに、岩が水に沈み始めるように、彼自身が水に沈み始めるのを認識する。危機の到来であること気づき、自分自身が何とかしなくてはならないという本能が働き、彼の外観はどんどん変化していく。そして彼が湖の中に沈んでしまう以前に、全身麻痺に陥ったような恐怖に圧倒されてしまい、ペトロはだれも助けはしてくれないのだから、自分のことは自分で何とかしなければならないという大うそが彼の耳に聞こえてきてしまう。そしてちょっと前に嵐の中にやって来て「私だ」とおっしゃってくださった全能でどんな混沌の中でもすべてを司ってくださる主に任せることができなくなってしまう。**

**今日私たちは救い主イエスに従う者として、もし自分が沈んでしまうということを感じたならば、自分の足を渦がまくような湖には踏み入れてはならないということを学んでいるのだろうか？　不安がどんどん膨らんでしまっていくとき、私たちはどたばたしはじめてしまうということを、自分自身でよく知っている。次々にいだき始めてしまう心配事を断ち切ってしまうことはできないのである。信者として実行しなければならない事項を遂行できなかった時に、自分はどうなってしまうのだろうかとか、だれもが信仰深い人間としてあるべき姿には成り得ないならどうなってしまうのだろうか、前人未到な地にイエスとともに足を踏み入れてしまい失敗しようものなら、いったい人々は自分のことをどう見るだろうか、自分ではなんとも不安定なイエスの弟子であり続けるということはどういうことか、などと考えてしまう。我々の内心にはこのような自分を麻痺させてしまう数々の恐れがある事を認識するとき、表には現れてこないこれらの恐れが自分たちを衰弱させ続ける力があることに気づくことになる。本日の福音書のストーリは、そのような恐れがもたらす苦悩から解放されるためには、そのような恐れ自体が表れてくる必要があることを物語っている。ペトロが自分の置かれた状況、つまり自分ひとりでは湖の上を歩くなどということをできず、神の救い無しには彼の一生が終わってしまうということを声に出して叫んだ時、イエスはまさに手をさしのべて、ペトロをつかみボートに引き上げた。**

**その瞬間に風が止まり、皆の視線はこの物語の主人公であり注目すべき方に集まった。この劇的な物語においてペトロが重要人物であったことを軽視すべきではないが、かといってペトロが立役者であるという間違いをしてはならない。主人公はあくまでイエスであり、ペトロのそしてわれわれにとっての救い主、どこの地球上の大地であろうがしっかり立っておられる御方、わたしたち以外のすべての人々にも限りなく関わってくださる方なのである。弟子たちは、その事がわかった時点で、湖の上をあるくことができるイエスがどのような方なのかということを思い巡らすのは止めて、はじめて神の子として拝むことになる。**

**ペトロが湖の上に出て最初の一歩を踏み出したことを「よくやった」と誉めるものもいなければ、ほかの弟子が次はもっとうまく行くようにと励ますような記録などは残っていないことを指摘しなければならない。　だれもがイエスに注目しているのだ。このエピソードから弟子たちがなにか学んだとするなら、それは人間はなにかと考え込んでしまい恐れれば恐れるほど疑惑の念に溺れてしまって自分たちの力ではそこから解放されないということだろう。　だからイエスが私たちの中に送られたということはとても良い知らせなのだ。　わたしたちが「もうだめだ沈んじゃう」と絶体絶命のピンチだと思い「助けて」と叫ぶとき、イエスはそこにいて私たちの叫びを聴いてくださっている。私たちにさしのべてくださる手は、神の手であり、溺れてしまうわたしたちを引き上げてくださる。自分たちがいかに弱きものであるかを認識しあい、神の恩恵を感謝しあう共同体を復元してくださる。　そして主イエスが次に何をしてくださるのかに眼を向ける。　アーメン**